



ESD・ユネスコスクール 群馬県ユネスコ連絡協議会 ユネスコスクール委員会 委員長 岸 正博

ESD・ユネスコスクールについて、県ユネ連として「委員会」が組織され、各ユ協や学校、企業、団体、行政当局等と連携して実践を進めていく第一歩を歩み出せることになった。

ESDで目指すべきは、「地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となる」よう、個々人を育成し、その意識と行動を変革することである。

日本のESDの特徴は次の五つとされる。①政府による目標と計画の策定、②学校教育における取組、③社会教育における取組・地域における多様な主体が参画・協働する取組、④トップダウンとボトムアップの取組の有機結合、⑤東日本大震災と福島第一原子力発電所事故が与えた教訓・影響(国連持続可能な開発のための教育の10年、ジャパンレポート)である。

私たちが取り組んでいるユネスコスクールは、「②学校教育における取組」として、「教育振興計画および学習指導要領を通じた推進、ユネスコスクールを核にした取組」である。

昨年の関アロ群馬大会第二分科会「ESD・ユネスコスクール部会」で提案を

していたいただいた、新島学園中・高等学校、前橋市立第六中学校をはじめ、利根実業高等学校、藤岡市の小・中学校など、ユネスコスクール加盟後の着実な実践とその発信に期待したい。

「ユネスコスクールって何?」「ユネスコスクールになったら、何かいいことがあるの?」等、いろいろな声を聞く。群馬県内のユネスコスクール加盟校十七校各校の着実な実践の成果と課題の発信が、これらの問いに答えることになる。

そのためには、県ユネ連の全てのユ協はもちろん、各地域の様々な団体、企業、行政などがESDの理解と共に、主体となって、学校教育、社会教育・地域における取組への支援・協力をしていくことが必須となる。

第二次大戦後に設立されたユネスコの理念は、「心の中に平和のとりでを築く」だった。現在では、「平和」と共に、文化・価値観の多様性を尊重するための「持続可能な開発」を包括的な目標としている。「開発」の意味について、国連開発計画(UNDP)では、「経済面、社会面、個人の生活のありようも含めて」「人間開発(Human Development)」という概念を用いている。日本ユネスコ協会連盟では、「持続可能な開発」Sustainable

Developmentとは、地球上の全ての人が、未来の世代にわたって「人間開発」を目指すことでもあるとしている。

文科省は、昨年の十一月、中教審に対して「次期教育課程の基準等の在り方」について諮問した。キーワードともいえる「新しい時代を生きる上で必要な資質・能力」として、OECDのキーコンピテ

県ユネスコ定期総会開催される

館林ユネスコ協会 莊司由利恵

平成二十七年年度の群馬県ユネスコ連絡協議会総会は、館林ユネスコ協会がホストとなり、平成二十七年五月九日(土)に館林市文化会館小ホールにおいて、六十八名の参加を得て開催されました。

午後二時より開会の挨拶に続き、ユネスコの歌「手に手をとって」を沼田ユ協さん指揮のもと、全員で斉唱の後、主催の群馬県ユネスコ連絡協議会会長関口実氏の挨拶を、次に主管の館林ユネスコ協会会長蛭間享一氏より挨拶を、来賓の群馬県教育委員会生涯学習課長下田明英氏(代理の生涯学習課青少年教育係長清水彰氏)並びに、館林市教育委員会教育長橋本文夫氏より祝辞を頂きました。議長には、北川絏一郎副会長が選出され議事に入りました。

議事では、平成二十六年度事業報告並びに決算報告、監査報告が行われ審議され、質疑のもと承認されました。次に平成二十七年年度事業計画案並びに予算案が

ンシー、国際バカロレアのカリキュラム、ユネスコのESDを牽引している。これらの取組が求める資質・能力は、現行学習指導要領が定める「生きる力」の育成と方向性において違いはない。まずは、ユネスコスクールが目指すべき方向性と育成すべき資質・能力を明らかにして、取組を進めたい。

審議され承認され盛会裡に閉会となりました。

閉会后、総会会場近くの「向井千秋記念子ども科学館」にてプラネタリウム投影を見て頂きました。

最後に、総会を開催するに当たり、県ユネ連、群馬県、館林市を始め関係各位にお世話になり、無事に開催できましたことを心より感謝申し上げます。

そして平成二十七年一月三十一日に逝去された我が館林ユ協前会長であり、群馬県ユネスコ連絡協議会副会長長吉田和美氏が総会を見守ってくれたであろうと思われました。

会章

